

## 「主を恐れる者は…祝福を受ける」

2005.5.8 赤羽聖書教会主日礼拝説教

### 都上りの歌

1. 幸いなことよ。  
すべて主を恐れ、主の道を歩む者は。
2. あなたは、  
自分の手の勤労の実を食べるとき、幸福で、しあわせであろう。
3. あなたの妻は、  
あなたの家の奥にいて、豊かに実を結ぶぶどうの木のようにだ。  
あなたの子らは、  
あなたの食卓を囲んで、オリーブの木を囲む若木のようにだ。
4. 見よ。  
主を恐れる人は、確かに、このように祝福を受ける。
5. 主はシオンからあなたを祝福される。  
あなたは、いのちの日の限り、エルサレムの繁栄を見よ。
6. あなたの子らの子たちを見よ。  
イスラエルの上に平和があるように。

## 説教

詩篇128篇では、どのような人が幸いであるか、そして、その幸いな人は具体的にどのように幸いを受けるかが、うたわれています。

まず、どのような人が幸いなのでしょう。それは「主を恐れ、主の道を歩む者」です。

1. 幸いなことよ。  
すべて主を恐れ、  
主の道を歩む者は。 (同格) 「主を恐れる者」すなわち「主の道を歩む者」の意味。

「主を恐れる」とは、人間が自分のやりたい放題、自分中心に生きるのではなく、神さまを中心にして生きることを意味します。万物の審判者にして、限りなく憐れみ深い、神さまを畏れて生きることです。「主の道を歩む」とは主の戒めに従って生きることを意味します。ですから、「主を恐れ、主の道を歩む者」の反対語は、「主を恐れることなく、自分勝手な道を歩む者」となるでしょう。このような「神への恐れなく、自分の道を歩む者」が幸いなのではない、「主を恐れ、主の道を歩む者」こそが「**幸いなことよ**」と、詩人は歌うのでした。(「祝福にあずかっている・祝福されている・幸いなるかな」という意味)

それでは、「主を恐れ、主の道を歩む者」は、どのような祝福を受けるのでしょうか。詩人は、「主を恐れ、主の道を歩む者」が受ける祝福は、家庭の祝福であると言います。それは、まず自分自身の祝福であり、妻の祝福であり、子供たちの祝福です。

2. あなたは、  
自分の手の勤労の実を食べるとき、幸福で、しあわせであろう。
3. あなたの妻は、  
あなたの家の奥にいて、豊かに実を結ぶぶどうの木のような。  
あなたの子らは、  
あなたの食卓を囲んで、オリーブの木を囲む若木のような。

一節では「幸いなことよ。すべて～な者は。」と涼しく一般論として歌われていたものが、突然、ここではぐっと迫って、「あなたは」という具合に、詩人は、これを読む私たちに、確信を持って語りかけます。「主を恐れ、主の道を歩んでいるあなたは」、「あなたの妻は」、「あなたの子らは」こうでしょう、こうこうこういう風に祝福されているでしょう、という具合に、です。具体的に見ていきましょう。まず、自分自身です。

2. あなたは、  
自分の手の勤労の実を食べるとき、幸福で、しあわせであろう。

この直訳は、「あなたは確かに両手の働き（の実）を食べ、あなたは幸いで、あなたは良い。」です。イスラエル人は、人が独立して生計を立て、自分に与えられた手のわざによって自分と家族を養っていくところに理想の生き方があると考えました。同時に、自然災害による不作、戦禍による略奪といったことを考えるならば、自分が骨折って苦労した働きの報酬を確実に口にすることは、古代人にとって決して当然のことではありませんでした。それはまさしく「幸いで、良い」ことであつたのです。「幸い」は1節と同じ「祝福されている」であり、「良い」は「これ以上ない究極の良さ」を意味します。たとえ自分ではそう感じなくても、何か欠けているように思えたとしても、天地創造の時に神さまが「良かった」と評価なさったように、客観的に見てこれ以上良くしようのないほどの究極の良さです。「主を恐れ、主の道を歩む者」は、自分が労苦した働きの実を食べて味わうことができるという、神さまの祝福と究極の良さを受けることができるというのでした。

3. あなたの妻は、  
あなたの家の奥にいて、豊かに実を結ぶぶどうの木のような。

「あなたの家の奥にいて」とは、イスラエルの家の間取りと関連があります。妻の部屋は、一番奥まった所にありました。つまり、家の入り口の所において、出たり入ったりウロウロしながら外で油売ったりしないで、どっかりと家の中において、家を守って、しっかりと家の働きをして、家族に良きものをもたらすという意味です。箴言3章を見ると、良き妻の模範的な姿が出てきますが、「しっかりと妻をだれが見つけることができよう。彼女の値うちは真珠よりもはるかに尊い。

夫の心は彼女を信頼し、彼は「収益」に欠けることがない。

彼女は生きながらえている間、夫に良いことをし、悪いことをしない。」

そして、

「彼女は羊毛や亜麻を手に入れ、喜んで自分の手でそれを仕上げる。

彼女は商人の舟のように、遠い所から食糧を運んで来る。

彼女は夜明け前に起き、家の者に食事を整え、召使の女たちに用事を言いつける。

彼女は畑をよく調べて、それを手に入れ、自分がかせいで、ぶどう畑を作り、腰に帯を強く引き締め、勇ましく腕をふるう。

彼女は収入がよいのを味わい、そのともしびは夜になっても消えない。

彼女は糸取り棒に手を差し伸べ、手に糸巻きをつかむ。

彼女は悩んでいる人に手を差し出し、貧しい者に手を差し伸べる。

彼女は家の者のために雪を恐れない。家の者はみな、あわせの着物を着ているからだ。

彼女は自分のための敷き物を作り、彼女の着物は亜麻布と紫色の撚り糸でできている。

夫は町囲みのうちで人々によく知られ、土地の長老たちとともに座に着く。

彼女は亜麻布の着物を作って、売り、帯を作って、商人に渡す。」

物質的な祝福をもたらすばかりでなく、霊的にも家族の全員を力づけ、励ます。

「彼女は力と気品を身につけ、ほほえみながら後の日を待つ。

彼女は口を開いて知恵深く語り、その舌には恵みのおしえがある。

彼女は家族の様子をよく見張り、怠惰のパンを食べない。」

家族のために買い出しに行き、食事を準備することは勿論のこと、糸を紡いで、自分と家族のために服を作り、しかも夏は夏服、冬は冬服、家計を助けるため内職したり、畑つくって、勇ましく腕を振るって作物を収穫し、そうかと思えば、いつも笑顔で家族を力づけて励まし、夫の仕事を成功させ、「知恵深い言葉」で「恵み深く」家族を教え、おまけに、自分の家族ばかりでなく、「悩んでいる人」や「貧しい者」にまで心砕き、「手を差し伸べて」助ける、と言うのでした。

このような、妻の尊い働きを、詩人は「豊かに実を結ぶぶどうの木のようにだ」とたとえます。イスラエル人にとって、ぶどうは人や民族の具体的な祝福の証しでした。「主を恐れ、主の道を歩む者」は、妻が箴言 3 1 章 10 節以降に見るような多くの良き働きをなして、次から次へと家族に神さまの祝福をもたらして、家庭を豊かに潤すのであると詩人は言います。

そして、さらに、祝福は、子どもたちにまで及びます。(3 節後半)

あなたの子らは、

あなたの食卓を囲んで、オリーブの木を囲む若木のようにだ。

「食卓」は、単に食事をするのみならず、そこで主人が律法を読み上げ、賛美と祈りを捧げて神さまを礼拝する場でありました。子供たちは、そこでみことばを学びながら、神の子として成長するのです。「オリーブ」は常緑樹で、生命力の象徴です。ですから、

「オリーブの若枝のようだ（直訳）」とは、食卓で神のことばを学びながら、世の誘惑に負けることなく、力強く、生き生きと成長していく、たくましい子どもたちの姿を描いています。「主を恐れ、主の道を歩む者」は、子供たちがみことばをよく学び、生命力たくましく、力強く成長していくと詩人は言うのです。しかも、ここで「オリーブ」を表現するために使われている言葉は、普通一般には、「栽培されたオリーブ」のみに使われる言葉が使われていて、自然に育つ自生植物でなく、「栽培されてこそ成長する」、すなわち親から愛情を受け、親からみことばの教育を受けて力強く成長していく姿が、実に絶妙に表現されているのです。

次の4節を見ると、これらが「主を恐れ、主の道を歩む者」に神さまが与えて下さる祝福であると詩人は再び総括します。

#### 4. 見よ。

**主を恐れる人は、確かに、このように祝福を受ける。**

「このように祝福を受ける」と言われているように、「主を恐れ、主の道を歩む者」が神さまからいただく祝福は、「自分の労苦の実を確実に食べることができる」という祝福です。「自分の妻が、ぶどうの木のように豊かに実を結ぶ」という祝福です。「自分の子どもたちが、オリーブの若枝のように、力強くみことばによって成長していく」という祝福です。私たちの耳慣れたわかりやすい言い方で表現するならば、仕事が祝され、夫婦関係が祝され、親子関係が祝され、トータルで家庭が祝される、というわけです。

それは、「主を恐れる」時に、祝されるのです。幸いを得ます。この上なく良き人生を生きることができるのです。「主を恐れて、主の道を歩む者」は、その家庭が祝されるのです。それは、「主を恐れる」時に、です。「主の道を歩む」時に、です。「自分勝手に生きることなく、神を畏れて、神さま中心に生きる」時に、です。その時に、「誰でも」、「わたしも」、「あなたも」、例外なく、「確かに」「このように祝福を受ける」と、詩人は「見よ！」と声を大にして、時空を越えて、今日を生きる私たちに呼びかけるのでした。

このように、私たちの人生が神さまに祝福されるために必要なのは、「主を恐れ、主の道を歩む」ことです。私たちの家庭が神さまに祝福されるために必要なのは、「主を恐れ、主の道を歩む」ことです。私たちの家庭が祝福されるために必要なのは、お金ではありません。私たちの家庭が祝福されるために必要なのは、より高い学歴や能力、社会的な地位や名誉でもありません。**私たちの家庭が祝福されるために必要なのは、唯一「主を恐れ、主の道を歩む」ことです。**私たちの人生が祝福されるために必要なのは、「主を恐れ、主の道を歩む」ことです。私たちの妻が、子どもたちが祝福されるために必要なのは、私たち自身が「主を恐れ、主の道を歩む」ことです。これ以外に必要なものはありません。なぜなら、私たちが信じ告白する神さまこそが、あらゆる祝福の源であられるからです。災いも、幸いも、みなこの神さまから出るものです。だから、この神を恐れ、その戒めを守って生きることが、何より大切なことです。伝道者の書を書いたソロモンの終わりの結論はこうでした。

**「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。**

**神を恐れよ。**

**神の命令を守れ。**

**これが人間にとってすべてである。」**

「戒め」を守る、すなわち、私たちが十戒を守って生きる、神を愛し、人を愛して生きる、それが、私たち自身の人生に祝福をもたらします。私たちの家庭に祝福をもたらします。神のみことば、神の戒め、神と人とを愛して生きる生き方こそが、「幸い」なんです。「祝福されて」います。「最高に良い」人生なんです。「主を恐れ、主の道を歩む」者は、最も幸いです。「主を恐れ、主の道を歩む」妻も、幸いです。「主を恐れ、主の道を歩む」子供らも、幸いです。「主を恐れ、主の道を歩む」者が築く家庭は、幸いなのです。

そして、5節・6節を見ると、このような個人の家庭の祝福は、単にそこにとどまることなく、イスラエルの首都エルサレム、さらにはイスラエル全体にまでつながっていくことが歌われます。

#### 5. 主はシオンからあなたを祝福される。

あなたは、いのちの日の限り、エルサレムの繁栄を見よ。

#### 6. あなたの子らの子たちを見よ。

イスラエルの上に平和があるように。

「主はシオンからあなたを祝福される。あなたは、いのちの日の限り、エルサレムの繁栄を見よ。(5)」「イスラエルの上に平和があるように。(6)」この祝福は、エルサレム、イスラエルと、場所を越えて広がりゆくにとどまらず、「あなたの子らの子たちを見よ！」と、遂には時間を超え、来るべき未来に向けて拡大していくと言います。この場合、「エルサレム」とは、神を礼拝する神殿がある故に特別な存在であると思われれます。それ故、「主がシオンからあなたを祝福される」と言われていると考えられます。だから、これは今日で言えば、神さまを礼拝する「教会」のようなものと考えていいでしょう。家庭と教会と国家とはいったい何の関わりがあるかと思うかも知れません。これらはすべて「家庭」を原型としています。教会は、家庭を原型としています。それで、使徒パウロは、教会のことを「神の家庭」と呼びます。家庭が墮落しなければ、教会は必要ありませんでした。家庭が墮落したから、その回復のために教会が必要だったのです。

家庭も、教会も、国家も、神と人を愛して神の栄光をあらわす器であるという点では、その本質は同じです。自分の家庭を治められない者が神の家なる教会を治められるはずがないと、使徒パウロは言いました。神さまを信じて忠実に教会生活を送り、家庭を治めれば、一国をも治めうると、ある国の大統領は言いました。国家も、教会も、家庭も、その祝福の中心にあるのは、神さまです。そして、祝福の鍵を握るのは、「主を恐れ、主の道を歩む」ことです。「主を恐れ、主の道を歩む」ことなくして、国も教会も家も治められません。

ここに集うおひとりおひとりが、「主を恐れ、主の道を歩んで」、自分自身の人生が神さまに祝福され、自分の家庭が神さまに祝福され、教会に、国家に、後々の時代にまで平和をもたらしていられるよう祈ります。